資料４

第１期（平成 15～16 年度）で取りまとめる

災害の具体的なイメージ

※本資料において提示されている災害はあくまで事務局のイメージであり、本調査会の第１期（平成 15 年度～16 年度）において取りまとめる災害の候補は本日の議論を踏まえて示すこととする。
※取りまとめる災害の候補については、小委員会において優先順位を付け、報告書の作成に着手する。
※取りまとめる災害の候補のうち、第１期で報告書の作成に至らなかったものについては、次期調査において取りまとめる災害の候補とするかどうかを再び検討する。

1　震災・津波

発生年	災　害　名	概　　要
１７０３ 元禄 16 年	元禄地震	M7.9～8.2。小田原の城下で死者 800 名以上。津波による死者は房総半島、外房海岸で 6700 名。家屋の倒壊と火災で江戸の死者数は 3 万名以上。
１７０７ 宝永４年	宝永地震	M8.4。全国で死者 2 万名、潰家 6 万戸、流失家 2 万戸以上。揺れの被害は東海道、伊勢湾、紀伊半島で、津波の被害は紀伊半島から九州までの太平洋岸(特に土佐）で大きい。東海・南海地震が同時に発生した可能性。
１８５４ 嘉永７年	安政東海地震	M8.4。被害は関東から近畿に及び、特に沼津から伊勢湾にかけての海岸で甚大な被害。津波は房総から土佐までに来襲。死者 2～3 千名、潰・焼失 3 万戸。
１８５４ 嘉永７年	安政南海地震	M8.4。東海地震の 32 時間後に発災。被害は中部から九州に及ぶ。津波が大きく、波高は串本で 15m、久礼 16m、種崎 11m など。紀州沿岸熊野以西の大半が流出。高知市付近では地盤が約 1m 沈下。
１８５５ 安政２年	安政江戸地震	M6.9。江戸湾荒川河口付近が震源。深川、本所、下谷、浅草等で激しい被害。武家を除いた死者は 3895 名(武家を含めると約 7 千名)、潰家 14,346 戸。翌日から町会所で炊き出しを開始。暴利取締令を発し、強制的に発災前の値段で日用品を売らせた。
１８９６ 明治 29 年	明治三陸地震津波	M8.5。地振動は震度 2～3 程度であったが、地震後 30～40 分後から波高 30m を越す津波が来襲し、死者約 2 万 2 千名(花火見物客 6～7 百名を含む)。
１９２３ 大正 12 年	関東大地震	M7.9。相模湾北西部が震源。正午直前(11:58)の発災であったため各所で火災が発生し、強風(風速 15m)により被害が拡大。死者 14 万名(旧陸軍被服廠跡での焼死者・窒息死者 3 万 2 千名)。
１９３３ 昭和８年	昭和三陸地震津波	M8.1。沿岸各地で震度５。崖崩れや壁の亀裂などの被害も生じたが、家屋、船舶を含め被害のほとんどは地震後 30～40 分後から来襲した波高 20m を越す津波によるもの。死者約 3 千名。
１９４４ 昭和 19 年	東南海地震	M7.9。静岡・愛知･三重などで死者不明 1,223 名、住宅全壊 17,599 戸、半壊 36,520 戸、流出 3,129 戸。津波が各地に来襲し、波高は熊野灘沿岸で 6～8m、遠州灘沿岸で 1～2m。
１９４６ 昭和 21 年	南海地震	M8.0。潮岬、高知市、津市などで震度５。被害は中部地方から九州地方に及び、死者 1,443 名、住宅全壊 11,591 戸、半壊 23,487 戸、流出 1,451 戸。津波は静岡県から九州に至る海岸に来襲し、徳島や高知の沿岸では、波高が 4～6m に達した。また、高知市付近では最大 1m 程度沈降し、低地に海水が流入する被害が生じた。

１９４８ 昭和 23 年	福井地震	M7.1。福井市で震度６。被害は福井平野及びその周辺に限られたが、死者 3,769 名、倒壊家屋 36,184 戸、半壊 11,816 戸に及ぶ。南北に延長約 25㎞ の断層が生じた。福井市内のほとんどの建築物が倒壊した。
１９６８ 昭和 43 年	十勝沖地震	M7.9。青森、八戸、むつなどで震度５。被害は北海道及び東北南部に及び、死者 52 名、住宅全壊 673 戸、半壊 3,004 戸。津波は日本海沿岸一帯に来襲し、三陸海岸では波高が 3～5m に達した。
１９９３ 平成５年	北海道南西沖地震	M7.8。奥尻で震度６、江差、小樽などで震度５。地震に加え津波による被害が大きく、死者 202 名、住宅全壊 509 戸、半壊 214 戸。特に地震後まもなく津波に襲われた奥尻島の被害は甚大であった。

2　風水害

発生年	災　害　名	概　　要
１７４２ 寛保２年	寛保２年の大水害	利根川上流の豪雨等の影響で発生。現在の埼玉県春日部市周辺で溺死者 9 千名以上、江戸下谷・浅草・本所で溺死者 4 千名。幕府が橋の復旧、焼飯の配布、遭難者救助、治安維持等の面で迅速な対応。民間有志が救助活動を実施。
１９３４ 昭和９年	室戸台風	死・行方不明者 3,036 名。猛烈な暴風と大阪湾の高潮により阪神地方を中心に大災害をもたらした。大阪湾においては水位５ｍのかつてない高潮が発生し、湾岸の工業地帯や市街地は大きな被害を受け、また大桟橋の３分の２が流出。
１９４７ 昭和 22 年	カスリーン台風	勢力は弱いが、前線性豪雨と重なった大雨により東日本各地は大水害に見舞われた。利根川・荒川両河川両堤防が破堤し、関東平野は一面の泥海と化した。
１９５３ 昭和 28 年	和歌山県有田川流域土砂災害	死者 111 名、行方不明者 85 名。この災害で花園村で発生した大規模崩壊により天然ダムが形成され、２ヶ月後の９月 25 日台風 13 号により決壊した。
１９５９ 昭和 34 年	伊勢湾台風	風速 30m 以上の暴風圏が半径 300 キロを超える大型台風。死者・行方不明者 5,098 人。被害総額 5 千億円。
２０００ 平成 12 年	東海豪雨	死者・行方不明者 10 名。名古屋市内の新川が約 100mにわたって破堤。愛知県及び近県の浸水家屋は６万戸以上。

3　火山災害

発生年	災　害　名	概　　要
１７０７ 宝永４年	富士山宝永噴火	須走村 75 戸が倒壊。降灰の影響が大きく 2 年後の宝永 6 年でも山麓の御殿場付近の 7 カ村の住人のうち、幕府の調査によれば、55%が飢餓状態。
１７８３ 天明３年	天明の浅間焼け （浅間山天明噴火）	爆発による溶岩が秒速 100m の火砕流となり鎌原村(現在の群馬県嬬恋村鎌原)を埋め尽くし、村人 570 名のうち 477 名が死亡。吾妻川に流れ込んだ火砕流が泥流となり下流で千数百名が死亡。
１７９２ 寛政４年	島原大変肥後迷惑 （雲仙普賢岳 寛政４年噴火）	前年から活動していた雲仙岳の火山噴火活動により、2 回の強い地震とともに島原と雲仙岳の間の眉山の東半分が崩壊し、対岸の肥後領に津波が来襲。死者約１万５千名（島原で死者約 1 万名、肥後約 5 千名）。
１９２６ 大正 15 年	十勝岳噴火 （大正泥流）	２度の噴火により中央火口丘が崩壊し、第１次泥流を引き起こす。さらに、泥流が周囲の積雪を溶かして第２次泥流を誘発。死者 144 人。
１９８６ 昭和 61 年	伊豆大島噴火	大規模な噴火により溶岩流が住宅密集地区に迫ったため、全島民約１万人が一時島外に避難。
１９９１ 平成３年	雲仙普賢岳噴火	６月に発生し、東側斜面を流下した火砕流により、43 名が死亡。溶岩ドームの成長とその崩落による火砕流は５年間にわたり断続的に起こった。

4　火災

発生年	災　害　名	概　　要
１６５７ 明暦３年	明暦の江戸大火	１月 18 日、本郷丸山の本妙寺から出火。おりからの北西の強風で、深川、牛島、新田まで広がったのに始まり、翌 19 日にも小石川鷹匠町で出火。火は江戸城本丸・二丸・三丸に及び、天守閣ほかを炎上させた。両日の火災で 500 以上の町と大名屋敷が焼け死者数も 10 万人以上に達した。
１９７６ 昭和 51 年	酒田の大火	昭和 51 年 10 月 29 日夕刻、酒田市中心部の商店街で発生した火災し、おりからの強風にあおられ、22.5ha を焼き尽くした。

5　その他の災害

発生年	災　害　名	概　　要
１８９０ 明治 23 年	エルテゥールル号 事件	トルコ軍艦エルテゥールル号が、暴風雨により和歌山県沖で沈没。周辺住民の救出作業にもかかわらず、587 名が死亡。

※概要については、理科年表等の資料より事務局において調整